

明治大学史資料センター

山中一弘

今号から、他大学の大学史関係機関を順次ご紹介することになりました。

第一回は、二〇〇四年三月竣工した巨大な研究・教育棟「アカデミーコモン」の地下に見事な展示場を開設し、益々充実の、明治大学史資料センターです。

年史編纂が淵源

明治大学史資料センターの淵源は、本学と同様大学史編纂事業にあるが、その歴史は古い。一八八一年創立の明治大学が「八十年史」準備の過程で一九六二年、広報課の一係として発足させたのが「歴史編纂資料室」であった。

年史の刊行は見送られたが、同室は資料の収集・整理や大学史研究に努め、六七年からは『歴史編纂報告集』（後に『歴史編纂事務室報告集』『大学史資料センター事務室報告集』と改題）も刊行した。

積み上げた成果は創立一〇〇周年事業に生かされ、同室は委員会と連携して『図録明治大学百年』（八〇年刊）を編纂した。また『明治大学史紀要』（八一年第一号、

九七年から『大学史紀要 紫紺の歴史』と改題）を舞台に研究成果の公表も積極的に開始した。組織はその後「総務部歴史編纂事務室」と改組され、「百年史」の編纂も、一〇〇周年（八一年）を大きく越えた九四年十月の『明治大学百年史（通史編Ⅱ）』刊行まで続いた。

年史刊行後、大学史担当部署は閉鎖または大幅な縮小の対象となることが多い。明治大学でもやはり紆余曲折があったとき。しかし担当者や親委員会の委員長（史学の木村礎氏、哲学の中村雄二郎氏などの大物教授が務めた）などの努力が実り、二〇〇二年秋には理事会において明治大学史資料センター規程が承認され、二〇〇三年四月、「明治大学史資料センター」が発足した。

「専門職員」を雇用

同センターは納谷廣美総長の主管の下、学校法人明治大学の一部門として、渡辺隆喜所長（法人理事、文学部教授）をはじめとする運営委員会の管理下におかれている。事務室は法人の総務部に属しているが、画期的なのはその職員の待遇である。

私立大学のアーカイブスでは、資料収集・整理や研究など、その中心業務を、嘱託として若手研究者が担っていることが多い。従って多くは数年間の有期契約という

不安定な立場で、賃金も高くない。

担当者を研究職として雇用した、おそらく私学初のケースが立教学院史資料センターの「学術調査員」であったが、有期契約（五年以内）で低賃金である点は、残念ながら何ら変わらない。

しかし明治大学は、専門知識を有する担当者を「専門職員」として、他の職員と同じ待遇で雇用している。しかも専門家としての採用であるから、希望しない限り定年まで他部署に異動することはない。

鈴木秀幸氏（事務長）、村松玄太氏、阿部裕樹氏の三名はそれぞれ日本近代史、政治史など大学史に関連深い分野の研究者であり、非常勤講師として自校史教育の教壇に立つこともある。しかも明治大学の専任職員として安定した雇用を約束されている。

「長期的な展望にたつて仕事ができる。」

鈴木事務長は、この制度のメリットをこう語った。

短期嘱託職員と人事異動のある一般職員に支えられている多くの私大アーカイブスの脆弱な体制に対して、一石を投じうる制度であろう。なお事務室にはさらに、庶務担当の職員一名と、若手研究者である嘱託職員二名が配置されている。

研究活動は、所長の委嘱により学内教員の中から選ばれた「研究調査員」（無給）により担われる。現在、「尾

佐竹猛関係」として二名、「安藤正楽関係」として三名が任命されている。

センターの「目標」と特色ある資料収集

明治大学史資料センターは「本法人の歴史に関する調査、研究並びに校史に係る資料の収集、保存及び公開を行い、もつて本学の発展に資する」（センター規程第2条）ことを目的に設置された。この規定自体は特別なものではない。しかしこれとは別に、同センターは自らの「目標」を次のように表現する。

- ① 「大学の『顔』としての存在」…校史に関する資料の収集・保存・管理のすべてを担い、明治大学の情報発信のひとつとなる。
- ② 「帰属意識の場」…多くの卒業生・学生・保護者・役員教職員等関係者にとつて、明治大学を強く意識する具体的な場所、拠り所となる。
- ③ 「情報のサービス」…問い合わせへの応対、展示や出版等によるサービスは言うまでもなく、公的機関として義務付けられた情報公開に向けて準備する。
- ④ 「伝統の維持・発展」…創立以来先人が営み、残してきたものを保存し、精力的な調査と客観的な研究により、将来に生かす。
- ⑤ 「大学史の開拓・構築」…日本における「大学史」

研究に、他大学や類縁機関と連携交流して寄与する。有力国立大学の大学史担当部署は、ここ数年の間に専任教員を擁する大学図書館として急速にその陣容を整えつつある。背景には情報公開法の施行という「追い風」があり、これによって各種情報の公開に応じなければならぬ公的機関として、国立大学でも旧資料の整理・保存が急務となった事情がある。それゆえこれらの機関では、いわゆる行政文書の管理が大きなウエイトを占めている。

ところがそうした「外圧」に頼ることが出来ない私立大学の大学史担当部署は、では年史刊行以外に何をもつてその存在意義を主張できるのか。明治大学史資料センターの「目標」は、それに対する一つの答えである。

すなわち同センターは自らの存在意義を、私学明治がその建学の精神にのっとって維持・発展していくための精神的拠点になることに見出し、それを「目標」として宣言したのだ。

「明治大学の特徴を重視し、創立者と校友、そしてそれらに関係する地方・地域の調査に力点を置いていきます。」というその姿勢は、下記の三件の研究プロジェクト・テーマにもはっきり現れている。

① 「尾佐竹猛関係資料」

※ 尾佐竹猛（一八八〇—一九四六）は一八九九年明治法

律学校を卒業、大審院判事、明治大学法学部教授、同文科専門部部長などを歴任した。国際法、暮末・維新史、明治文化など幅広い分野で生涯に五十冊近い著書をもしたが、死後も復刻版や著作集などが刊行されるなど、高い評価を得ている。

② 「安藤正楽関係資料」

※ 安藤正楽（一八六六—一九五三）は明治法律学校で国際法を学んだのち一八八九年に愛媛県に帰郷、県議となり、以降生涯非戦を説いた平和運動家。

③ 「三木武夫関係資料」

※ 三木武夫（一九〇七—一九八八）は、明治大学専門部商科（二九年）および同大学法科（三七年）を卒業。三七年から連続十九回衆議院議員に当選、七四年から七六年まで総理大臣を務めた。

これらについては、調査研究員、専門職員が精力的に資料収集・整理に努め、研究を重ねている。このたびその成果が認められ、ある出版社で、明治大学史資料センターの編・解説による尾佐竹猛著作集復刻版刊行の企画が進んでいると聞く。

展示や自校史教育も

百年史刊行後の「歴史編纂事務室」存続の危機に際して、同室ではその生き残りを賭けて、さまざまな機会に

名乗りを上げて展示を実施してきたという。その実績が現在のセンター隆盛のきっかけの一つになっただけであつて、同センターの展示は見事である。

常設展示場は、二〇〇四年三月竣工のアカデミーコモン地下一階にある。その下、地下二階には旧「商品博物館」「刑事博物館」「考古学博物館」をまとめた「明治大学博物館」がある。博物館はいわば「名所」として学外からの見学者も多い。大学史展示室は、この博物館への入り口で、博物館への来館者も必ず観ることになる好位置にある。まさに「大学の顔」の役割を果たしている。

面積は一一七平米。「三人の創立者」「明治法律学校の誕生」「山あり谷ありの時代」「大学昇格」「戦争と明治大学」「戦後の復興と改革」「和泉と生田のキャンパス」の通史展示と、「女子部の時代」「サークル活動の盛行」「校友紹介」などのテーマ・ゾーンからなり、数百点の展示品が、専門のデザイナーによる上品なデザインで陳列・掲示されている。

なお、東京の街を見下ろす絶好のスペース、九八年竣工の高層校舎リバテータワー二三階共同展示場でも不定期に展示を実施しており、一月には同大が久々に出場したことを記念して「箱根駅伝」関係の展示が行われていた。駿河台校舎「大学小史展」は、学生会館一階ロビーで九九年から行われており、和泉校舎では「和泉小

史展」が二〇〇〇年から行われている。

また現在、自治体や校友会の全面的な協力を得て、三人の創立者それぞれの出身地での出張展示も行われている。二〇〇四年五月には、「明治大学創立者 岸本辰雄展」（鳥取市文化センター）が開催され、六月には「天童が生んだ人物 —明治・大正の教育者たち—」（天童市旧東村山郡役所資料館）において宮城浩蔵にまつわる展示が実現した。今後、鯖江市における矢代探関係の展示も実施し、さらには明治大学とそれら三地域連携のプログラムをおこなうという構想もあると聞く。

センターはまた、自校史教育の分野でも積極的に活動している。

鈴木事務長によれば、明治大学で自校史教育が起こつた要因は二つで、一つは百年史編纂後の新しい大学史事業の模索の中から、もう一つは九〇年代大学改革の流れの中からであったという。

同センターを中心に企画された講座「日本近代史と明治大学」は、九七年度和泉校舎（文系一、一二年生対象）で開講し、現在、生田、駿河台とすべてのキャンパスで開講されている。講義は一年間で通史を概観するが、半期受講も出来るようになっていく。所長の渡辺教授をはじめ、センター運営委員、調査研究員などが順次教壇に立つており、鈴木事務長も各キャンパスで五、六回ずつ

講義を受け持つ。

おわりに

大学史編纂室の「老舗」をルーツに持つ明治大学史料センターは、以上紹介したように、斬新な企画を精力的にこなす先進的な機関に変貌していた。それは「明治大学の顔」であるだけでなく、いまや私立大学アーカイブスのひとつの模範でもあろう。


しかしこの隆盛は、センター自身の努力もさることながら、大学当局の理解、校友や地域社会の協力などによるところも大きいのではないだろうか。大学を取り巻く人々の大学を愛する心の強さが、その「拠り所」としての大学史資料センターを強力にバックアップしている――。「同業者」として学ぶべきところの多い存在である。

明治大学のシンボル

The Symbol of MEIJI University

明治大学の象徴的な存在ともいえる、創立者・校歌・旧記念館などに関する資料を展示したコーナーである。

三人の創立者





大 矢 野
MITSUMASA
理 本 康 助
SHOMEI
青 木 浩 蔵

The Campus Life Experience

体験・学園生活

昭和期を中心に、授業・学業を再現したコーナーである。当時の学園生活を体験していただきたい。





ここは明治大学の歴史のなかで、特約的な事柄・業績などを展示するコーナーである。今後時々、展示替えをしていく。

テーマコーナー

The Cross-section the Meiji University History

明治大学の歴史を開設当初から前代館に展示したコーナーである。

明治大学史展示室パンフレット

明治大学の歴史 —— History of Meiji University

明治法律学校の誕生 1870～1880

The Meiji Law School founded



1881(明治14)年1月17日、筑紫屋橋旧鳥居藩邸の一角に明治法律学校は開校した。

山あり谷ありの時代 1880～1910年代

The time of challenges

明治法律学校は必ずしも順調なスタートを切ったわけではなかった。



大学昇格 1920～1930年代

The university status

明治大学が大学令下の大学に昇格、すなわち名実ともに大学となるのは1920(大正9)年である。



戦争と明治大学

The WW II and Meiji University

大学昇格を果たした明治大学は、総合大学としての陣容を整える。しかし戦争とファシズムの足音が忍び寄ってきていた。

1940年代前半



戦後の復興と改革

The Post-war Recovery and Reform

1949(昭和24)年に明治大学は新制大学となり、財政難に苦しみながらも大学の再建と拡張が進められた。

1945～1970



和泉と生田のキャンパス

The Izumi and Ikuta Campuses

和泉では、1934(昭和9)年4月から予科の授業が開始された。一方、生田は敗戦後の1951年4月から農学部キャンパスとなった。1965年からは、工学部全年学が同地に移った。



<DATA>

- (1) 事務室

所在地	〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学学生会館 6階
電話	03(3296)4085・4329
面積	94.5㎡
事務取扱時間	月～金 9:00～17:00 土 8:30～12:00
- (2) 大学史展示室

所在地	明治大学アカデミーコモン地下1階
面積	117㎡
開室時間	10:00～16:30(入室は16:00まで)
休室日	8月の土曜日 夏季休業日(8月10日～16日) 冬季休業日(12月26日～1月7日) * 開室時間・休室日には変更の場合があります。
観覧料	無料
- (3) 大学史資料室

所在地	明治大学14号館 2階
面積	203.38㎡
- (4) 大学史作業室

所在地	明治大学11号館 1階
面積	99㎡